

牛久の偉人図鑑 ③

牛久の歴史や文化の発展に功績を残した偉人をご紹介します

イラスト制作は市内5校の
中学校美術部生徒が順番に
担当します！

問 広報広聴課
☎内線3221、3222

ゆかりの人物

茨城県出身の日本画家の大家、 横山大観との関わり

茨城県出身で近代日本画の重鎮である横山大観は展覧会に出品された芋銭の作品に目を留め、日本美術院の同人に推薦をしました。同人になった芋銭は、その後も多くの展覧会に作品を発表し、さらに注目されるようになりました。

※日本美術院…1898年に岡倉天心らが創設した歴史ある美術家団体で、同人とはそこに所属する画家。

ゆかりの スポット

得月院(城中町258)

小川家の菩提寺で芋銭のお墓があります。本堂にある扁額「得月禅院」は大正13年に芋銭から奉納されたもの。境内にある樅は芋銭の作品「樹下石人談」のモデルになったといわれ、樹齢500年以上の巨木で市指定文化財(天然記念物)です。



人物像

「仙人」とも称された素朴な人柄

食べ物の中では芋、豆腐、そばを好んでいたようで、特に里芋が好物でした。また旅好きで素朴な容姿と人柄から「沼畔の仙人」とも称されました。



イラスト: kei

イラスト: ひまり

河童の芋銭

基本データ

【生没年】明治元年(1868)~昭和13年(1938)

【出身地】武蔵国江戸赤坂溜池

(現:東京都港区赤坂)

【主な業績】河童をモチーフにした絵や挿絵を数多く残しており、「河童の芋銭」として全国的に有名になった日本画家、俳人。

こぼれ話

芋銭の本名は茂吉。画号「芋銭」のほか、俳人として活動する際は俳号「牛里」という名前を使っていました。「芋銭」は「自分の絵が芋を買うくらい(金)になれば」という謙虚な思いから、「牛里」は幼少期から生涯の大半を過ごした牛久への郷土愛から名付けたものです。

河童の絵で名を馳せた日本画家 絵描きとしての始まり

芋銭は明治元年に江戸赤坂溜池にある牛久藩邸内で牛久藩大目付小川伝右衛門賢勝の長男として生まれました。明治4年には廃藩置県により小川家は新治県城中村(現在の城中町)に移り住み、農業を営みます。体の弱かった芋銭は農作業に向かず、東京の親戚の小間物屋に丁稚に出されます。しかし店の仕事にも体がついていけず、別の親戚に引き取られます。その後、洋画家・本多錦吉郎と出会い、画塾「彰技堂」に入り、本格的に洋画を学びました。これが彼の絵描きの第一歩となりました。4年間「彰技堂」で学んだあとは新聞社でスケッチや漫画を描いていました。しかし明治26年に父親からの命令で牛久に呼び戻されます。

夫を支える妻

牛久に戻った芋銭は農業に励みましたが、しかし本来、体が弱く農業に向かなかった芋銭。その芋銭を支えたのは帰郷後に結婚した妻・こうでした。こうは芋銭が絵に専念できるように、夫の分まで農作業をし、夫を支えました。このこうの働きにより、父親は芋銭の絵について黙認するようになりました。



挿絵から日本画へ

明治41年、今まで新聞や雑誌で発表した挿絵をまとめた画集「草汁漫画」を刊行すると、その内容が反響を呼び、仕事の依頼も増えました。しかし、挿絵だけで満足しなかった芋銭は本格的な日本画の制作を目指すようになり、その後数々の作品を発表し、日本美術院の同人となります。画家として活動を始めた芋銭は長期の旅に出るようになり、「於那羅合戦」などの作品を完成させていきます。

晩年は、自身が描いた河童の絵100枚を集めた画集「河童百図」を完成させました。「河童」の絵を描き続けた芋銭は「芋銭の河童が、河童の芋銭か」と言われています。自然や人を愛し、名作を数多く残し、昭和13年に牛久で亡くなるまで、生涯現役の画家として活躍しました。

イラスト: あーる

河童百図
「遊戯三昧」

ゆかりの スポット

小川芋銭記念館「雲魚亭」(城中町2690-3) 「河童の碑」

「雲魚亭」は芋銭のアトリエ兼居宅として昭和12年に新築され、現在は芋銭の複製画や愛用品等が展示されています。雲魚亭のほど近くに立つ「河童の碑」は芋銭を慕う人びとの手によって戦後の昭和27年に建立され、芋銭の略歴を記した文が刻まれています。



【イラスト制作】ひたち野うしく中学校美術部 【参考文献】いばらき文化情報ネット「茨城の先人たち」、牛久むかしばなし・伝記八「小川芋銭」(牛久市立図書館発行)、牛久市観光協会HP